

日本人の自殺の特色

近沢, 敬一
福岡大学

<https://doi.org/10.15017/2231587>

出版情報 : 九州人類学会報. 5, pp.2-7, 1977-12-15. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :



日本人の自殺の特色

福岡大学 近 沢 敬 一

日本人の自殺の二つの特色について考えてみたい。一つは日本人の自殺の集団性であり、もう一つは地位との関わりであって、日本では高い地位の者ほど自殺率が低いということである。

I 集団自殺

集団自殺と呼ばれるものに、その人々の相互関係からして三つに分けることができるかと思われる。イ。情死と言われるもので、男女両性の二人からなるのが一般である。典型的には恋愛関係にある二人である。ロ。親子心中と言われるのが集団自殺の第二の形であるが、母とその子父とその子、父母とその子の三つが含まれる。ハ。情死にも親子心中にも入らないもので、典型的には敗戦のときなど、多数の軍人が一ヶ所で同時に割腹したりするものである。ハの形はもちろん日本にも見られるものであるが、(打援皆洞谷に投りて死にぬ。日本書紀・景行天皇紀・十二年冬十月、白虎隊、終戦時には各地で、手榴弾などで一緒に死んだものがあつたと伝えられる)。しかし、これは日本独特のものではなく、世界的に広く見られる事実のようである。古代ローマにもそのような例を見る。(フランス社会学年報参照) このようなことからして、これはあるいは日本独特とか、日本に特に多い自殺形態だと言えないかも知れない。いずれにせよ、もっと調査してみる必要がある事項と思われる。いまは詳しく述べない事とする。

1. 情 死

情死は日本人の特徴的自殺の方法としてかなり古くから考えられていたようであり、また日本の学者の自殺研究の一つの中心ともなっていたように思われる。その最も著しい例は、九州大学の前身九州帝国大学の社会学の教授であつた井口孝親の遺著「自殺の社会学的研究」の大半は彼の言う所の「情死国産論」の排撃のための実証と理論だと言って誤まりないであろう。まず情死とは何かをはっきりさせる必要がある。警察の統計が「情死を謀りて」、または男女の集団自殺としているものがそれである。典型的には社会的理由や経済的理由で、恋愛を阻まれた男女と一緒に死ぬことである。典型的なものから、合意とか、同時同所とか、両性とか、二人とかその他の条件を除いた、無理心中、跡追心中、親子心中と同性心中、三人心中にいたるまで心中という名で呼び、それを嘆賞しないまでも承認しようとするのが日本人であろうか。無理心中が心中と呼ばれるのは、少くとも片方だけでも一緒に死にたいという意志があつて、それが企てられるところにあり、親子心中も同性心中も、三人心中も一緒に死にたいので、跡追心中も一緒に死にたかったが、死後の世界でなりとも一緒にいたいという期待をもって行わ

れるものであろう。ここにこれらの自殺が単なる自殺と呼ばれず、心中と呼ばれる理由があり、心中が複数自殺、二重自殺とは異なる理由がある。ヨーロッパにも日本の情死に当たるものが存在し、ある時期にはかなり多数に達したことは、井口孝親の研究で明らかであるのでこれを否定することはできない。しかし日本語の心中に当るような語が生れなかったという事実は無視できない。（井口孝親著「自殺の社会学的研究」、小林隆之助著「情死考」参照）

もう一度心中という語義を尋ねてみると、これは誰かに対して節操を生命をこえて守り通すという意味をもつ心中立てから来ている。情死と書かれても一般にはしんじゅうと読まれる場合が多く、情死を音で「じゅうし」と読むのは客観的に見ようとする学者先生とか、愛情による死を見てセンセーショナルに扱おうとする新聞記者であったように思われる。小林隆之助の考証によると、心中という語の起りは心中立という言葉だという。心中立ての意味は「心に二つなき真意を相手に示す、其の手段方法を指すの謂いに外ならなかった。」（情死考参照）「而し、此のしるしを用いることは独り傾城のみに限られ、……何が故に傾城のみの専有物であったかと言うに、其の生業上、……相手の男の不安と猜疑とを容易に取り除くことの能わぬ点があるからである。」（上掲書）、「ここにおいてか真実その二心のない実意を示すには、何としても之を形の上に示さなければならぬ、その結果紙に認めて心中を誓う、謂所起請誓紙なるものが用いられるようになったのである。心中を形ちに表わす手立は之れが其の初めであって、爰に於て「心中立」なる言葉が始めて出来た訳である」（情死考）として心中を形に表わす手立だから心中立だと言っているように聞える。私には心中立の「だて」は「義理立て」のたてや人をたてる、すなわち、「ある人の地位を（認める）、承認する）、または（承認したことにする）」という意味ではないかと思う。「心中立てをする」とは二心のないという心のかを認められるようにすることではないのか。「義理立てをする」が義理を欠いていないことを明らかに相手にわかるような行為をすることであるのと類似の形式をもった言葉である。この「心中立て」から立てが落ちることにより「心中」が生れたとき「心中」という語が持った意味は「心中立て」の最も極端な、端的な形態として相手と死をともにするという事になっており、女は遊女に限らず、町家の娘や妻たちも入ることになっていた。相手と死をともにするというのが心中だとすれば、無理心中、跡追心中というのも心中の中に入り得るはずである。親子心中も、夫婦心中もまた心中の一つと数えておかしくないことになる。ヨーロッパや中国で使われているdouble suicidesとかDoppelselbstmordとか雙斃というような語は心中という語が持っている「相手の心と一致しているということを明らかに示す」というような精神的な意味は持ち得ないし、また跡追心中とか、無理心中にあたる言葉も現にないし、あり得ないはずである。従って最もすぐれた最近の親子心中の研究者飯塚進が「親子

心中」という言葉を使うことを嫌って道連れ自殺と言っているのは当然であり、決して誤りではない。しかし社会現象の本質というか、社会現象についてわれわれが知りたいことは、実は外的な現象ではなくて、心の動きではなからうか。「主観的に思われた意味を解明しつつ……」と社会学を定義したマックス・ウェバーはその意味でこの事を最も明瞭に示した人だと言える。しかしここで注意しなければならないことは、われわれが目標としている心の動きは直接知り得ないのであって、その人の言葉とか表情とか行為など表面に表われたものを通してしか知り得ないということである。それはとにかく私は社会的行為は、それがどのように受け取られるかということをも含めて考うべきものと思っている。なぜかなら、それが行われるとき一般にはある受取られ方をする事を意図されて行われるものであり、少くともどのような受取られ方をするかが行為者に知られているものとして扱われる。社会の中で行われる行為はそのようなものである。そうとすれば形は一見同じに見えても日本人の心中は心中だが、ヨーロッパ人のそれはdouble suicideまたはdouble suicide in love（二重自殺または愛情による二重自殺）として両者を区別するのが妥当ではなからうか。

情死について見ても、日本には古事記または日本書記に二つまたは一つを指摘できる。これら二つとも同母兄妹間のものであることは（狭穂彦，狭穂姫）（軽郎子，軽太郎女）注意すべきことである。次の情死多発期が近世の新興の町人階級の勃興期であるように、これも古代の日本の支配階級の勃興期であり、変動期として一種のアノミー状態の存在が考えられるのではなからうか。この点はさらに深く考察すべき内容を持っているように思われる。

井口孝親の労作「自殺の社会学的研究」によって明らかになったことは、ヨーロッパにも日本と同じく情死があるということ、ときにはヨーロッパのある地域の情死率は日本の情死率にほとんど近づくことがあるということであった。（井口孝親「自殺の社会学的研究」）ということは逆に見れば日本の方が情死率は高いということのようである。韓国もしくは朝鮮については井口のヨーロッパ程度の研究も行われていないと思われるので何とも言えないが、シナ（中国）については何人かの文学の専門家たちが、日本の明治末期に日本に来た留学生が帰って情死を行うまで日本の情死に当るものはなかったように言っている。（さねとうけいしう）（一、二の跡追心中的なものはあっても）これらの事を考え合せるとき、情死はある社会的状況が存在の条件になっていると思われる。しかしそれだけで情死が起るかというに、そこには先例とかモデルとを呼ばれるものがあることが発生のための重要な要件となっていると思われる。大塚久雄がいう所の思想とか宗教とかイデーというものとその役割において相似たもののようなものである。（大塚久雄：社会科学の方法参照）

2. 親子心中

井口孝親は「自殺の社会学的研究」において示したことは、情死がヨーロッパにあるということだけでなく、親子心中に相当する複数自殺がヨーロッパにあるということである。私が内務省統計報告と犯罪統計書を資料として知ることができたことは、(1)情死率は大戦前は増加していたのに、第二次大戦後は減少したと思われること。(2)親子心中の方は戦後もかならずしも減少の傾向を示さないということであった。(近代日本人の自殺、その2 福岡大学人文論叢 8巻3号)。ここに親子心中と情死との間に共通の面があると同時に共通でない要因の存在を推測せざるを得ない理由を認めた。すなわちどちらも普通の自殺よりもより大きく経済不況の影響を受けることが明らかになった。しかし社会の近代化は核家族化をもたらし、これは親子心中を多くしているように見える。核家族は困難がないときはよいが、農村共同体から脱出して都市の新しい団地などに住む場合、近隣の干渉から免れるとともに、近隣の援助をも失って、危急の状態に出あうとき救いの道を見出し得ないことになる。情死の典型的なものはそれに対して、恋愛を否定する古い道徳とそれに抵抗して解放を求める男女の間の葛藤なのだから、古い道徳がいよいよ弱まりつつある現代社会においては、このような情死が減りつつあるのは肯けることであろう。

Ⅱ 地位と自殺

日本では地位の高いものほど自殺しにくいようである。そのことは戦前では軍人の自殺率を見ると、将来将校になれる士官学校、幼年学校の生徒たちの自殺率が最も低く、次に低いのが下士官、次が兵卒、次が陸軍刑務所に入っている人々で、この人々の自殺率は異常に高いものであった。フランスの軍隊では将校か下士官など軍隊に長くいるものの自殺率が高いことは、デュルケムにより愛他的自殺の一例証として挙げられていて有名である。(デュルケム・自殺論参照)。日本のばあい男子有業者全体についての統計が1960年、1965年厚生省によって作られているが、訂正自殺率をとってもやはり管理職の自殺率が最も低く、農業従事者または採鉱採石従事者が最も高い。はじめは農業従事者が高く、あとでは採鉱採石従事者が最高になっている。傾斜生産と言われて炭鉱労務者が優遇され、後にはスクラップアンドビルト等と言われて、ほとんどスクラップ扱いされた炭鉱労務者の姿が自殺率にも現われている。

アメリカでは社長・重役などの自殺率が高いそうである。ある学者はアメリカの老人の自殺率の高さをその地位の高さで説明しようとさえしていた。(雑誌ルック参照)

他の文化との相関

私は日本人の自殺の二つの特色、一つは集団的傾向、もう一つは地位との逆相関をあげた。この二つはいずれも日本の民族性とでもいうべきものの現われではないかということを指摘したい。

もちろん人間はすべて集団傾向を持っているであろう。しかし個人によって集団傾向に差があるように、性的にも差があるように思われる。同じ学生でも男は自分の考えで行動し、女は友達の行動につられて行動する傾向がある。すなわち女子学生は友達が行くから行く、友達が行かないから行かないというような傾向である。情死の場合、発議者は女が多い（大道和一：情死の研究）と言われることはこの説に反するようだが、女はもし発議しても男が受け入れてくれなければひとりでは死ななかったからこそ情死になるわけである。それはとも角この女性がもっている集団性というより同調性を日本人は他の民族より多く持っているのではなかろうか。これが集団自殺というよりも同調自殺とも呼ぶべきいろんな形の心中が日本に多いのではなかろうか。荒木博之氏は日本人の国民性として集団主義をあげ、その著しい例としてガイド付きの旅行団をあげている。ガイドが、「右をごらん下さい、あれが有名な何々です」と言えば右を向く、「左を……」と言えば左を向く、しかしガイドが指示しない限りは酒を呑んだり、トランプをしたりしている。ヨーロッパやアメリカであのようなガイド付き旅行団を組織したならば、そのような旅行にはたちまち応募する人がいなくなるだろうということを、カンドウ神父も随筆の中で言っていると書いている。（日本人の行動様式）

地位との逆相関と言わば下積みの者、下層のものが全体、または全体の象徴、または全体の平和の象徴である秩序のしわよせを受けること、犠牲になることが甚だ多いということであろうか。簡単に言えば上の者、強い者は全体の承認のもとに下の者を弱い者を犠牲にすることができるのである。この傾向は私どもが無意識に使っている日本語の中に現われている。宛名の書き方、姓名の呼び方など日本語とヨーロッパ語とはまるで反対で、われわれは大きい方から、彼らは小さい方からする。数の数え方も13から19までは古い時代のものをよく残しているのだろう。英語、独語など日本語と反対に小さい方から3、10というような呼び方をしている。Ladies and Gentlemen というのは女が強いからではなくて、女は弱いからだということである。日本のことわざには「獅子身中の虫」というのがあるが、これに当る英語のことわざはないのだろう。和英辞典では、a snake in one's bosom; a treacherous friend という訳がつけてあった。（研究社：新和英大辞典）これらの英語の語句は内部にいる害敵という意味を持っているが、大きいものの中に巣食う小さな害敵という大小の対照の意味を持っていない。また、「小の虫を殺して、大の虫を生かす」という語の英訳は、Kill a few to save the manyとなっていた。（上掲書）この場合、この様な英語の慣用句があるかどうか知らないが、英語を直訳

すれば多数のものを救うために少数を殺すであって、日本語の場合とは大いにニュアンスが異なる。日本語は大小の対比であって、英語は多少の対比である。日本語にはよく使われた言葉として「滅私奉公」というのがあるが、これに相当するような熟語は英語にはないらしい。同じ辞典に三つはど訳が出ているが、皆意味を説明したものである。一例をあげれば、sacrificing one's personal interest to public good である。「長い物には巻かれよ」も同じ和英辞典によると yield to the powerful (即ち有力な者には譲歩せよ) という訳と、諺としては、don't kick against the pricks というのが出ている。この諺は、「刺ある鞭を蹴るは難し」(使徒行伝 9 章 5 節) という聖書の有名な句からきている。この場合の prick は先の尖ったとげとか針とか、きりとかを意味するようである。この英語の諺を英和辞典で調べてみると、「無駄な抵抗をして大けがをするな」となっている(岩波英和大辞典)。ここには日本の諺では最初に出てくる長い者すなわち有力者という語は表には出て来ないから、pricks とは害を与えるものなら何でもよいわけである。たまたま聖書ではイエスという超有力者になったに過ぎないのではなかろうか。このようにして、長いものには巻かれよを英語に訳するとき、「長いもの」がもっていた有力者という意味は消えてしまう。「獅子身中の虫」は常に害虫として忌み嫌うべきものであり、「小の虫を殺して大の虫を生かす」というとき、人々はそれを承認する。滅私奉公という語句は、誠に美しい言葉として日本人の涙を誘うものだが、その中の奉公は「奉公する」などと使われて、上の者、有力者、金持ちに、下の者、無力な者、貧乏人が雇われて働くことにもなるのである。ここで公とは上位の者、支配者という意味を持つに過ぎないとも言える。このように見てくるとき、わたしたち日本人の心を最近まで支配していた意識は、下の者は上の者の犠牲になるのは当然だということであり、現在もなお心の奥底にはこの気持があるのではなかろうか。「とかげは頭さえ残れば手足は後から生えてくる」という福大商学部学生児玉義弘君が教えてくれたことわざは、今までの諸事例を集約したものとも思われる。つり銭の数え方なども上記の諸事例の一つとしてよいのではなかろうか。

上述の民族性ともいうべき二つの性格、同調性と滅私奉公型の社会関係に適応した性格とは、いずれも日本の水田農耕社会に適応した性格であったと言えるのではなかろうか。